

鏡を見る私

—ホミノイドにおける自己意識の生成と構造についての試論—

清 水 明

0. はじめに

本稿は、自己意識の生成についてのある理論的困難に対する解決案の検討をおこなうとともに、自己意識の構造記述に関するいくつかの理解可能性について検討するが、問題の背景を明らかにするために、まず、自己意識をめぐる思想的・文化的文脈のいくつかの側面と、近年明らかになった実証科学的諸事実とを確認しておきたい。

1. 「私とは何か」という問い

「私とは何か」という問いは日常生活の中で、あまり頻繁ではないが、時に発せられることのある問いである。その場合、「私は〇〇である」という時のその「〇〇」の部分、たとえば「私は主婦である」とか「私は教師である」、あるいは「私は有能である」とか「私は常識人である」などの、私についての、いわば述語的部分が自分でわからなくなって、あるいは、自分で思っているのと周囲の評価とが食い違って、その自己規定を考え直そうという問いである。人生の何らかの転機に遭遇し、新たな自己像を模索している場面が考えられる。この問いが以上のような問いであるとき、この問いは結局のところ「私はどのような人間か」「私はどのような人生を歩むべきか」ということを問題にしているのであり、いわゆる「人生哲学」の問題と言えよう。

しかし、「私とは何か」は、以上の人生哲学の問題とはまったく異なることを問う問いと解することもできる。つまり、「私とは〇〇である」の前の部分、いわば主語的部分を問う問いである。「私」そのものを問題にして、そもそも「私」というのはいったい何か、私であるとはどういうことなのかを問う問いである。人は誰でも自分のことを「私」と呼んでいるが、そのように呼ぶとき「私」ということでどのようなものを考えているのか。

これに対する一つの答に、そして近代に特有な答と考えられるものに「私とは自己意識である」という答がある。つまり、私とは自己であり、自己であるとは自己を意識していることである、という答である。この意味に解された問い「私とは何か」は、言うまでもなく「人間とは何か」という問いの一部であって、この意味に解された「私とは何か」の答は「人間とは何か」の答の一部になっている。近、現代では人間を意識を持つものとする。とりわけ、自己意識を持つものとする。それゆえ意

識が不可逆的に消失し、もはや回復の見込みがなくなってしまった身体は時に物体に近い扱いを受けるであろう。近代以前においてはそうではなかったのではなかろうか。意識を消失しても肉体は大切に扱われたのではなかろうか。その習慣はまだわずかに残っている。いまでも、骨になるまで、いや、骨になった後ですら、私たちは人間の体を大切に扱おうとするのではないだろうか。人間の自己理解は一通りではなく、何重もの層が重なって出来上がっているであろう。

私とは自己意識であるという答は、現在では様々な理由で疑問視され、すでに多くの人の共感を呼ばないものになっている。しかし、私とは何であるかという問いに対して、よりよい答が見つかったわけではなく、また、この自己意識ということについて、十分考え抜かれているわけでもない。また、一度発見した自己意識という自己理解の層がきれいさっぱり取り除かれてしまうということも起こりそうにない。そこで、新たな答を探すためにも、この答のことをもっとよく知り、どこに問題があったのかを考えてみる必要がある。

2. ナルキッソス神話

自己意識ということで興味深く思い出されるのは、水に映った自分の姿が自分の像であることに気が付かなかったとされている、伝説上の人物⁽¹⁾、ナルキッソスの物語である。この話はギリシア神話の中でも有名なエピソードであるので、物語を紹介することは、それ自体楽しいことであるのだが、割愛することにしよう。

水に映った姿が自分であることがわからない人間は、普通はいない⁽²⁾。それにもかかわらず、このような人間、水に映った姿を自己として認知できないことを除けば普通の人間と変るところのない人間像を創作した古代ギリシア人の想像力には驚かされる。日常生活を送るのに支障のない能力を持ちながら、自己鏡映像認知の能力を持たない人間というのはありえないのだから。このことは、古代ギリシア人の想像力が、人間的諸能力から自己鏡映像認知の能力のみを抽出したということであり、彼らが人間的諸能力のうちでそれのみに関心を示すことがあった、ということをも物語っている。古代ギリシア人に自己意識という概念はなかったと思われるが、言葉や概念がなくても暗黙のうちに事柄の輪郭を捉えることは可能なのである。

精神分析学において、ナルキッソスの物語からナルシズムという用語が作られるが、その際の意味は「自己愛」であり、他者に向かうべき愛が自己の身体あるいは自己全般に向かうことと解されたことも、よく知られている。

精神分析思想の展開において、この用語を導入したレリスやフロイトらの、ナルシズムを倒錯や治療の対象として捉える初期の見方から、フェダーンやコフートの「健康なナルシズム」という捉え方までさまざまな見方があるが、肯定的にせよ否定的にせよ、ナルシズムが自己全能感や幸福感とかかわる現象であるという捉え方は共通している。ナルシズムは、直接的には自己による自己肯定であるが、他者によって自己が肯定される経験に左右される現象であることが経験的事実として確かでもあり、他者との関わりの中での自己形成として、自我論の中心問題をなすことは間違いない。

このように、ナルシズムとは自己愛を意味するようになったのだが、元のギリシア神話において

は、鏡像に恋したナルキッソスはその鏡像を今まで見たこともない美少年と思った、という話である。ということは、ナルキッソスはその鏡像を自己として認知していなかったということになる。つまり、ナルキッソスの愛は、彼自身にとっては他者への愛であったのだ。それまでのうぬぼれ屋のナルキッソスはナルシストであったが、水に映る自分の姿を他者としてみたナルキッソスは、初めて自分以外のものを愛するようになったのであり、ナルシストではなくなった、そういう話とも考えられる。

ただし、その後ローマ期になって、ギリシア神話を元にして作られた、オウィディウスの『変身物語』では、ナルキッソスは水に映った姿が自分であると気付くという話になっている。古代ギリシアの異様な人間像に比べて、他の点では芸術的に洗練されたとはいえ、人間像としては常識的で平凡なものになっている。自己意識を人間の本質と考える近代の人間観に一步近づいていると思われる。

3. ホミノイドにおける自己認識

近代の人間観、特に、自己意識に人間の本質をみる人間観は、近年の動物生態学、とりわけ霊長類の生態学や比較認知科学のめざましい発展によって、修正を要するものとなった⁽³⁾。霊長類の生態学によれば、道具の使用や、文化や社会の存在など、従来人間とその社会だけの特徴と考えられてきたことの多くが、霊長類に共通の特徴であることがわかってきた（共通とは言っても、もちろんヒトと他の霊長類の間では質的に大きな違いがある）。そのなかで、自己意識を持つという特徴は、人間固有の特徴ではなく、また霊長類全体に共通する特徴でもなく、どうやら、ヒトを含むホミノイドのみに限られる特徴らしいことがわかってきた⁽⁴⁾。ホミノイドとは、ヒトと大型類人猿すなわちオランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ボノボ（ピグミーチンパンジーとも言う）の総称であり、分類学的には霊長目真猿亜目ヒト上科のうち、ヒト科とオランウータン科の動物である。ヒト上科にはもう一つテナガザル科があるが、テナガザルに自己意識を持つような行動は観察されない。オランウータン科にはオランウータンのみが含まれ、ヒト科のうちにはヒト、ゴリラ、チンパンジー、ボノボが含まれる。

自己意識を持つかどうかは直接には当事者しかわからないことであり、それを当事者以外のものがどのようにして確認するか。これは言うまでもなく他我認識の問題である。生態学及び比較認知科学では、この点に関し、鏡を見せてそこに映った姿を自分であると認知するかどうかを有力な判定手段としている。自分であると認知しているかどうかということもまだ、まさに他我認識の問題の圏内であるが、そこは、自分であると認知していると思われる行動をするかどうかで判定している。そうした行動とは、たとえば鏡を見ながら歯に挟まった食べ物のかすを取るといったような、自己の身体を対象とする行動が、鏡像を見る視覚行動と連動して行われる行動であり、その背後に自己意識を想定することが自然であるような行動である（自己指向性反応）。そうした行動をのみとらえて結論づけるなら、懐疑的な人からはまだ異論が出るおそれがあるが、こうした研究では、以下で述べるような、他の様々な行動との詳細な比較が行われており、より一層の理論的解明を必要としているものの、実際上の研究方法としては十分納得のゆくものである。

これらの研究では、霊長類など研究対象となっている動物の反応（鏡に対する反応）を次のような

いくつかの反応カテゴリーに分類している。

第一は「社会的反応 **Social behavior**」と呼ばれている。これは、鏡映像を他の同種の個体とみなしているような反応である。親和的行動や威嚇行動がこれに入る。

第二は「探索反応 **Exploratory behavior**」である。これは、鏡あるいは鏡映像を探索する反応であって、鏡の裏をのぞき込む、鏡に手を触れるなどの行動である。

第三に「協応反応 **Contingent behavior**」と呼ばれる反応がある。これは、鏡映像の視覚イメージと自分の運動感覚とを結びつけていると思われる反応のことである。ただし、この場合、身体動作の開始が、鏡に視線を向けることよりも先行するもの、とされている。身体を動かしながら鏡を見る。手を舐めながら鏡を見るなどの行動がこれに入る。

第四に「自己指向性反応 **Self-directed behavior**」と呼ばれる反応がある。文字通りには「自己に向けられた反応」であるが、実際観察の対象となるものは自己の身体に対して向けられた反応である。注意すべきは、身体動作の開始前に鏡を見る動作が先行するもの、とされている点である。第三の反応とは順序が違うのである。鏡を見ながら自己の身体部位を触る、鏡を見て歯の間の食べ物かすをとる、鏡を見ながら口から泡を吹く（遊んでいるのである）などの行動がこれに入る。

第五に「表象的行動 **Representative behavior**」と呼ばれる反応も考えられている。これには、母親の「あれは誰」との問いかけに対して、自分を指さしたり自分の名前で答えることができるなどの行動が入る。

自己意識を持つことがホミノイドに共通の特徴であるとされるのは、他の霊長類では第一から第三の反応カテゴリーまでの反応は観察されるが、第四の自己指向性反応は観察されず、それが観察されるのはホミノイドだけだからである。

自己鏡映像認知（を示す反応の観察）によって自己意識の存在を判定するという方法論に対しては生態学や比較認知科学内部でも様々な論議がされているようであるが、主に自己認知の有無の判定を巡ってのものであるように思われる。たとえば、自己鏡映像認知の実験では染料テストというものを行う。染料テストとは、被験者（サルや人間）の顔に当人に気付かれないように染料を塗っておいて、鏡を見せる。それで被験者が自分の顔に手をやって染料を拭うかどうかを見るという実験であるが、染料を拭う動作の有無では自己認知を判定できないのではないかという疑問がある。被験者の文化によっては顔に付いた汚れを気にしないということがあり得るからである。自己認知が可能な個体でもその反応をしないことがあり得るという指摘である。このような議論も大切であるが、しかし、方法論的な問題としては、もう一つの種類があると思われる。自己認知の有無を自己意識の有無と考えてよいか、という問題である。

動物が獲物に飛びかかる時、その動物は自己の身体と獲物の位置とを認知して飛びかかる力を調節しているであろう。その場合、自己の身体とその位置を認知しているのであるから、自己認知をしていると言えないことはない。しかし、そのような行動は霊長類どころか、はるか下等な動物にも広く見られる行動であり、とうていそれらすべてに自己意識の存在を認めることはできないだろう。自己認知と自己意識の概念がその両方ともまだ曖昧なのである。

たとえば、ただちに思い浮かぶ疑問は、第三カテゴリーの協応反応の段階でなぜ自己認知と言って

はいけないのだろうか、ということである。第二カテゴリーの探索反応ですでに鏡に対する探索が始まっている。それは鏡の中の像が実物（同類の他者）ではないことをうすうす認知していることを表している（これを、うすうす気付いている、と言ってよいかどうかは微妙である）。第三カテゴリーの協応反応、すなわち、「身体を動かしながら鏡を見る」「手を舐めながら鏡を見る」などの行動は自己の身体が鏡に映っていることを認知しているのではないのだろうか。

これらの疑問に答えるためには、何かを認知すること、何かに気付くこと、何かを意識すること、これらの間の異同あるいは関係を検討しなければならないし、また、何かを意識することと、自己を意識することとの異同あるいは関係について検討しなければならないだろう。体のかゆいところを無意識に掻いていることがあるが、その場合、かゆい場所を認知しているが意識はしていない。自己意識とは普通、明らかにはっきりと自覚して自己を意識していることを意味するが、半ば無意識状態での自己の身体についての認知も自己意識の中に含めるとすれば、自己意識の概念は大幅に現在のものとは異なることになる。

行動によって意識の在り方を判定するという方法論にとって、それを行うに足るだけの十分な意識概念をまだ私たちは持っていないと言ってよい。

さて、霊長類を主として研究対象とする研究の他に、自己鏡映像認知に関する研究は、ヒトの幼児を対象としても行われている。その種の比較認知科学の知見によれば、ヒトの乳幼児の鏡に対する反応は次のような三段階を経て発達するという。第一期はおおよそ生後6ヶ月から11ヶ月で、いわば他者への反応の時期である。たとえば鏡映像に対して笑いかける、発声する、ほおずりするなどの行動が見られる。しかし、こうした行動は1歳半頃には急速に減少するという。次に第二期は、おおよそ生後9ヶ月から14ヶ月で、いわば鏡映像の探索の時期である。たとえば鏡映像を観察する、鏡の後ろを探索するなどの行動が見られる。こうした行動は1歳半頃まで続くという。鏡映像の探索の後には「鏡から回避する反応」の時期もあるという。その時期には鏡映像に対してしりごみする、泣き出すなどの行動が見られるという。そして、第三期は生後18ヶ月から24ヶ月とされ、この時期に「自己認知」が完成するとされる¹⁵⁾。霊長類を対象とした研究において区別されていた「協応反応」と「自己指向性反応」の区別がここにはない。自己意識を持つことがヒトと霊長類に共通の特徴らしいことがわかって来つつあるが、さらなる研究のためには、自己意識の概念の多様化と、それらの各々と種々の反応型とのすりあわせとが必要であると思われる。

自己意識を持つことがホミノイドに共通の特徴だとすると、ヒトの先祖が自己認知の能力を獲得したのは、ホミノイドが小型類人猿と分かれた約2100万年前から、ホミノイドのなかでオランウータン（アジア起源のホミノイド）がアフリカ起源のホミノイド（オランウータン以外のホミノイド）と分かれる1300万年前までの比較的短い時期と考えられる。つまりそれは、言語能力を獲得するはるか以前であったということになる。

この点は自己意識の成立に言語能力を前提にはできないことを意味しているように思われる。自己意識の形成理論、そして自我論全体にとって避けて通れない論点である。

4. 鏡像が自分の姿であると、どうしてわかるのか

以上は前置きの話である。問題は、「私たちはいかにして自己認知能力を獲得できたのか」ということである。私たち、つまり自己であるような者、あるいは、自分が自分であることを知っている者、自己意識というものを持っている者、である。自己とは何か、私とは何か、自己意識とは何かということを考えようというとき、この問題がきわめて重要になってくる。

ここで私たちはホミノイドである。そして、1歳半以上になった私たちは、である。他の動物にはできず、1歳半以上の健常なホミノイドにのみできる、という事実がある。それが、いかにしてできるかを、まだ私たちは知らない。

自己認知能力の存在を示すような行動の観察や調査、そしてそれがどの範囲の動物種に可能かということ、そしてそれらの動物種の間での進化過程上の類縁関係、これらのことについて調べることはできるが、「いかにして可能か」ということに対しての解答は、比較認知科学あるいは、進化生物学的な研究からは得られない。しかし、もう一つ道が残っている。その能力を持っている本人に尋ねるという道である。私たち自らに問うという道である。私たちこそその能力を持っている。それがいかなる能力であるかを明らかにできる者がいるとしたら、それは私たち以外にはいない。

さてここで、一番即物的な問いの形「私たちは、鏡像が自分の姿であると、どうしてわかるのか」という形で問いを立ててみよう。ただちにいくつかの解答案が思い浮かぶ。以下、それぞれの解答案を述べ、果たして十分な解答になっているかどうか検討してみよう。

【解答案1】

「自分は自分の姿形についてよく知っている。その、知っている姿と同じ姿が鏡に映っている。それで、鏡像は自分の姿であることがわかる。」

この解答案1についてはまず次のように問わねばならない。「自分は自分の姿形についてよく知っている」と言うが、それはどうやって知ったのか、と。「鏡を見て知った」では答にならない。鏡を見ること以外の仕方では自分の姿を知る方法はあるだろうか。

鏡を見なくても自分の姿はある程度自分の目でも見える。しかし、自分の目に見える自分の身体の様子は、他人の身体に見える姿とはまったく異なる。両脇から腕がにゅっと出ており、その付け根は、まっすぐ向いているときにはよく見えない。右の腕の付け根を見ようとすれば見えるが、その時は左の腕は見えなくなる。左の腕の付け根を見ようとすると、今度は右腕の付け根が見えなくなる。同時に、両腕の付け根を見ることはできない。私の顔は、と言うと、かろうじて鼻の先のようなものがぼんやりと見えるだけである。背中ときたらまるで見えない。私にも他の人のように、顔があるのだろうか、また、背中はあるのだろうか。自分の目に見える自分の姿とはこういうものである。

このような姿と、鏡に映った（さしあたって誰だかわからない人の）姿はまったく異なる。従って、両者が同じだとわかるわけがない。

この解答案1は解答になっていない。解答案1では鏡像は自分の姿だとはわからない。鏡に映っている姿は、誰だかわからない人の姿である。その姿に対しては「社会的反応」しか可能ではないだろう。

【解答案2】

「鏡の中の身体像は、私が動くたびにそれに呼応して動く。他人の姿は、そのようなことはない。他人の身体ではないとすると、それは自分の身体である。」

この解答案は、どのような前提によって成り立っているのだろうか。まず、「他人の身体ではないから自分の身体だ」という論理が成り立つためには、他人も自分も身体を持ち、そのことを私が知っている、という前提が必要である。とりわけ、自分も身体を持ち、そのことを知っている（ただし、どのような姿であるかは知らずに）という前提が。その前提なしだと、鏡の中の身体像は、他人の身体にしてはとても奇妙な身体である、というところまでしか言えず、それが私の身体であると結論付けることはできないであろう。

次に、「自分が動くたびに鏡像がそれに呼応して動く」ということを理解するためには、自分が動くということ、そして私がそのことを知っている、という前提がある。この前提にはさらにいくつかの前提が必要である。まず、「自分が動く」という点では、先と同じ前提「自分も身体を持ち、そのことを知っている」が必要であるが、さらに、それは単に「持っている」というような静的な認識ではなく「動くもの」という動的な認識が必要である。自分は動くような何か、それを身体と名付けることのできるような何かなのである。まず、そのことを私は知っている必要がある。次に、「私が動く」ことを理解していたにしても、それと「鏡像が呼応して動く」と捉えることは、他にも動くものはたくさんあるのだから、とりわけ私の動きと鏡像の動きを結びつける何かがなければならない。

解答案2が成り立つためには、第一に私は動く身体についての知を持っており、第二にその動きと鏡像の動きとが関係があることを知っている必要がある。第一のものは「身体についての暗黙知」とも言うべきものであろう。これがどのようにして可能なのか、その点は未だ謎であるが、そのような暗黙知の次元があるということは、往々言われることでもある。そしてその暗黙知はたとえば身体運動感覚のように、運動を含み、しかもそれが全体として身体の姿形についての認識をもそのうちに含むような、そのような暗黙知なのである。第二の身体運動感覚と鏡像との関連づけについても、いまだそれがいかにして可能であるかは謎のままである。

解答案2は、以上のような補強がないとすれば、解答にはならない。鏡像は他人の身体に似ているが奇妙な身体であるというところから、せいぜい「探索反応」をひきおこすだけであろう。しかし、その奇妙さは解消されない。

【解答案3】（鏡の法則を学習することによって）

「鏡の前に立つと、そこに映るものは、鏡の前にあるものである。鏡の前には私がいる。故に、鏡に映っているものは、私の身体である。」

この解答案の場合、自己鏡映像認知と鏡の機能学習のどちらが論理的に先立つのかが問題である。鏡についての学習はどのようにして可能かと問うた場合、鏡に自分の姿が映っているのを見て、と答えるとすれば、循環してしまう。

自分の姿を鏡で見る経験を持ち出さずに、他の経験によって鏡の機能を学習できるだろうか。たとえば、池や静かな海や湖に、空の雲や水辺の木々などが映っている、そのようなものを見た経験から、鏡の機能を知ることができる、と答えられるだろうか。

そのような経験から、水面は物を映す（二重に見えさせる）、ということ学ぶことすらむずかしい。よく似た形が二つ並んでいるのが見える。しかし、その一方が他方の像である、ということはどのようにして知ることができるのだろうか。確かに一方は触ることができ、他方は触ろうとすると水に触れたような感触とともに姿が乱れて触れることができない、という違いに気付くことは可能であろう。そのとき、どのようにして視覚と触覚とを関連づけることができるのだろうか。そして、一方に実物の資格を与え、他方には像の資格を与えるということはいかにして可能なのだろうか。

また、鏡の像と鏡の前に置かれたものとを同時に見ることは難しいという点も理論的困難を引き起こす。鏡に対して真横から眺めたとき、私たちは、鏡に映っているものを見ることはできない。また、鏡の前のものも、その横から見た姿でしかなく、鏡に映っている姿とは異なっているだろう。

この解答例3は、鏡像の理解のためには、一般に「像」の理解が必要であること、「像」の理解のためには、実物と像の区別と同時に両者を結合する何かが必要であることに気付かせてくれる。他の動物の「社会的反応」にはこの「像」の理解が欠けており、「探索反応」には「鏡像が実像であることへの疑い」「像理解への芽生え」があるように思われる。また、解答例2の最後で問題にした、運動する身体についての暗黙知と鏡の中の像とを関連づけるものの、少なくともその主要な部分は、この鏡像理解にあると思われる。

鏡像理解のためには実物と像の区別と結合が必要であるが、これを与えてくれそうなものとしては、今私がここにいるというリアルな感覚と少し離れた位置に見える私の姿、その中でも私は私自身の存在を感じるものの、それは何かしら希薄で実在感の乏しい在り方であるようなそのような自己感覚、この二つのものの間の差であると答えたい。しかしそう答えると明らかな循環に陥る。

以上の考察からは、自己鏡映像認知と鏡像理解とは、鏡像理解があれば自己鏡映像認知も可能になるが、自己鏡映像認知があれば鏡像理解も可能になる。しかし、その両方を同時に考えると循環論証になってしまうという関係、いわば論理的緊張関係にあるということである。実際、事柄としてはその成立は同時であろう。鏡像理解を獲得することは鏡に映った姿が自分であることがわかることなのである。解答例3はそうした論理的に緊張した事態の存在について教えてくれるものの、その緊張をいかにしてヒトの幼児や一般にホミノイドが飛び越えていったのか、それを教えてくれない。自己の身体運動と鏡像を見る視覚は「協応反応」を形成するであろうが、それがいかにして可能なのかは、いまだ謎なのである。

【解答案4】

「鏡に向かって、他の物（他の人であればなおよい）と並んで立ち、あるいは、相前後して立ち、あるいは、最もありそうなこととしては、母親に抱かれながら、鏡の中を見るという経験をすれば、正面を向いた実物の姿と鏡の中の姿を同時に（あるいは時間的に相前後して）見ることができる。そして隣にある物体（あるいは隣にいる人）を正面から見るときの姿が鏡の中にあることを知る。すると、

鏡（という不思議な作用を持つ物体）の前に立つと、その前に立った物（人）の姿を見ることができ、という法則を知る。ところで、鏡の中にはその物（隣の人）と並んで、もう一つの身体が映っている。するとこの像は私の像である。」

「私が身体を持っていること」（あるいは「私」と「私の身体」とを区別しない言い方をすれば）「私が鏡の前にいるということ」をあらかじめ知っているということ、これらのことを前提していることは以前の解答案2や解答案3と同様であり、また、自己鏡映像認知を鏡像理解に基づけている点も解答案3と同じである。従って以前と同様の論理的欠陥があるが、解答案4は解答案3と異なる点も持っており、それは、解答案3が自己の身体と自己鏡映像との間で鏡像理解を得るとしているのに対して、解答案4では自分以外のもの（典型的には母親）即ち他者の姿とその鏡映像とを同時に見る（正確には時間的に相前後して見る）ことによって鏡像理解を得るという点である。そして、鏡像理解と同時に自己鏡映像認知も行われるという点である。

ラカンの言う「鏡像段階」では、このような経験が幼児の自己形成にとって重要であるという。また、事実として、この時期（鏡像段階、6ヶ月～18ヶ月）の幼児は鏡の中の自分を観察したり、鏡に映った周囲を見ようと振り向いたり、はしゃいだりするという。あきらかに、鏡にものが映る、ということの経験に驚き、その意味を学んでいるかのようなのである。ラカンは、幼児が鏡の中の自分を認知するとき、母親が重要な役割をしている、という。幼児は鏡に映った姿が自分であることに気付くが（ラカンはそれがいかにして可能かは論じてないが）、その際、母親の承認が必要であるとラカンは言う。幼児は自分の発見を確かめるかのように母親を振り向き、同意を求めるのだという。「そう、あれはあなたよ」、そこで幼児は「あれは私だ」と知るのだという。

ラカンが問題にした自我の形成過程について、そしてその際の母親の役割については、今は措いておこう。自己認知を可能にする論理的機制を明らかにすることが課題である。解答案4は、魅力的な説であるが、自己鏡映像認知の根拠を鏡像理解に求めている点で、「私は私が鏡の前にいることをどのようにして知ることができたのか」この問題がどうしても残ってしまう。そしてこのこと、つまり、私が鏡の前にいるということを知ることは、鏡の前にいる自己を意識することであり、自己意識を持つこととほとんど一緒なのである。

さて、以上の解答案を通じては、「鏡の中の像を、どうして自分だとわかるのか」という問いに対しては、「自己意識を持っている者であるならば、それは可能である」という答しかできなかったことになる。従って、自己意識の発生を「鏡を見る」という経験を通じてである、と説明することは、論理的には何の説明にもなっていないことがわかった。

進化の過程で、あるとき、ホミノイドの祖先は、自己意識を獲得し、そしておそらくそれと同時に鏡に映る姿を自分の姿であるとわかる能力を獲得したのであるが、その両者の間に、いかなる因果関係（あるいは説明関係）も設定することはできないのである。両者は、同じ一つの能力の誕生を言っているだけである。

ところで、「私は私が鏡の前にいることをどのようにして知ることができたのか」この問いが自己意識の可能性を問題にしている問いとしてどのような問いであるか、もう少し考察を加えておくことにする。

「鏡の前にいる」ということは、身体を携えた者としての私であり、身体と分離された精神としての、純粋な意識としての私ではない。従って、この問いの形は、心身二元論を前提としたものではないと言える。では、次のような問いはどうであろうか。

「私は私が存在していることを、どのようにして知ることができたのか」

この問いの形は、精神とか、身体などの言葉が出てこないで、一見すると心身二元論に対して中立的であるように思われよう。しかし、まさにこのような問いの形から、デカルト的な純粹精神としての「私」という、特異な「私」概念が成立したという歴史的事実がある。この問いの形は、「私」を「いま」「ここ」という具体性の中で問うことをしていないという点で抽象的である。もっとはっきり言えば、この問いの形は、身体が存在を半ば意図的に排除しているとみなすべきであろう。（実際、デカルトは意図的に排除した。）それゆえむしろ問いの形は、次のものでなければならないのである。

「私は、いまここにいることを、どのようにして知ることができたのか」

これは、現代において、見当識があるかどうかを調べる際の問いでもある。見当識があるということは「はっきりした自己意識を持っている」かどうかを調べることである。

「今はいつですか」「今日は何日ですか」「今日は何曜日ですか」「ここはどこですか」「あなたは誰ですか」「あなたの名前はなんですか」等々。だが、このような問いはロボット（人工知能）に対しても発することができ、そして現在のロボットはこれらの問いに対して容易に答えることができるだろう。それゆえ、これらの問いに答えることができたとしても、ちゃんとした意識を持っている事の証明にはならないが、少なくともこれらの問いに答えることができなければ、見当識を失っている、それゆえ、はっきりした自己意識はない、意識があるにしてもすでにそれはあやふやになっている、と判断されるのである。

5. 自己意識の構造

逆に、自己意識とはいかなるものか、自己意識の構造はどのようなものかということを、鏡を見ることをモデルに考えてみよう。自己意識を持つとき、つまり自分自身を意識するとき、私たちは反省を行っている。反省 **reflection** すなわち反射である。鏡に映った自分の姿を見るような仕方自分自身を「見ること」これが反省であり、反省を行うことを自己意識を持つことと考えようということである。では、それはどのような構造になっているのか。自己意識の構造を考えることは自己意識の概念の構造を考えることでもある。

反省が鏡を見るような仕方で行われていると考えるとき、私は心の中に小さな鏡を持っていて、それに私自身を映し出し、映った姿を私が見る、という構図が考えられる。小さな鏡というのはもちろん比喩であり、いわば鏡のような働きをしている私の心の機能である。この構図の中に、まずは、三

つの私が登場する。私が私を私に映してみる。

鏡のような働きをしているものを心の中に探しても見つからないではないか、と思う人もいるであろう。確かに、内省しても、鏡に相当するような何ものも見つからないように思われる。しかし、本物の鏡も見えないものであることに注意すれば⁽⁶⁾、心の中に鏡に相当するものが見つからないからといって、ないとは言えない。しかし、その私の心の中で鏡の働きをするもの、それを「私あるいは私の一部、あるいは私に属する何か」（以下省略して「私」）とすることはできない。なぜなら、それはまだ見いだされていないのだから。

また、物理的な鏡に映るものは私の身体であるが、この比喩的な鏡に映るものは身体ではなく、「私のおこないや態度、気持ちなど、いわゆる精神的な事柄を主とした、私に関する物事、私に属すると考えられるものすべて」（これも、以下省略して「私」という）である。

さて、そうすると私が私を意識するとき、「見る私」と「見られる私」とが対峙しているという構造が考えられる。⁽⁷⁾

見る私 — 見られる私

しかし、先に私の心の中の小さな鏡が、それは見られていないという理由で、私（あるいはその一部、あるいは…の省略形）と呼ぶことがはばかられた。「見られる私」に関しては、それを私と言ってよいであろう。しかし、「見る私」は見られていないのだから、それを私と呼ぶことはできないのではないだろうか。

すると残るのは「見られた私」だけになる。しかし、それは奇妙である。「見られた私」だけがあって、「見るもの」が何もないというのは奇妙である。「見られた私」がある以上、それを見ている何者かがいるはずである。しかし、この瞬間、この見ている何者かを「私」と呼ぶことはできない。それを私だというなんの根拠もないからである。ただし、次の瞬間、この見ている何者かを見ることはできる。つまり、

私は、私を見ている私を見る。

すなわち、見ている何者かは私だったのである。このように、意識が単に私のおこないや現在の私の気持ちに向いているだけの段階から、さらに進んで、自分は今自分を意識しているのだと気付くという段階が生じる。見ている何者か（「見る私」）が「見られた私」になることによって、それが私だとわかる。しかしこの第二段階の意識のあり方の表現は「私は、私を見ている私を見る」としてよいのだろうか。明らかに間違いである。括弧の中の最初の字の「私」で表されるものは「見る私—見られる私」の「見る私」に相当し、したがって、まだ「私」とは言えないものなのである。「私」と言うためには、第三段階の意識が必要になってくるだろう。そして、この過程は果てしなくなる。

問題は、こうした事態をどう理解したらよいのかということである。

【理解の仕方1】

我々の経験でも、自分を意識することがあり、そしてその意識している私を意識するということがあるのだから、さらに私を意識している私を意識する私、というのも当然あるはずだ、と考える。しかし、こう考えると、無限に意識する私が後退して行く。次のように。

(… (((私を意識する私) を意識する私) を意識する私) を意識する私…

おのおの「私」は出現する次元を異にしているのだから、それらを添字で区別すると、次のようになる。

(… (((私₁を意識する私₂) を意識する私₃) を意識する私₄) を意識する私₅…

しかし、実際にどの私まで捉えられるだろうか。私₄はとても無理であろう。私₃もあやしい。この「理解の仕方1」は我々の経験に合わないのではないだろうか。また、無限に後退するということは、説明をいつまでも延期することだとも考えられる。

興味深いことに、私が鏡の中に見る像について正確に記述しようとするときにも、同じような無限後退が生じる。次のようにである。

私は鏡の中の私₁の姿を見る。その姿はしかし、鏡の中の私₁を見ている私₂ではないのか。なぜなら、今、鏡の前にいる私は鏡の中の私₁を見ているのであり、そしてその姿が鏡に映っているはずであるのだから。しかし、するとその姿は、鏡の中の私₁を見ている私₂を見ている私₃ではないのか、なぜなら、今、鏡の前にいる私は鏡の中の私₁を見ている私₂を見ているのであり、そしてその姿が鏡に映っているはずであるのだから。以下同様。

「鏡の中の私」の記述と「理解の仕方1」による自己意識の構造記述(記述かどうかあやしいが)とは、さしあたって別の事態である。しかし同様の無限後退が生じるということには、何らかの連関があると思われる。しかし、それがどのような連関であるか、いまだよくわからない。今後の課題としたい。

【理解の仕方2】

こうした無限後退を避けるためには、この系列のどこかに、系列を延長しなくても済むような項を持ってくればよい。すなわち、見られるまでもなくすでに自分を知っているような私を考えればよい。そしてそれはいたずらに系列を延長した後に持てこなくてもよいだろう。私₂がそういう私だとすればよい。すると次のような構造になる。

① 私₁を意識する私₂、

② 私₂は自分(私₂)をすでに意識している

このように考えると、①での「意識する」と②での「意識する」は異なるものになる。そこで、次のように区別する。

- ①' 私₁を(意識する₁)私₂
- ②' 私₂は自分(私₂)をすでに(意識している₂)

意識する₁は意識するものと意識されるものとが異なる場合の意識するである。意識する₂では、意識するものと意識されるものとは同じである。実際、このように意識に二種類のものを考えることが、近世哲学の主流となってきた。また、第二の意味での意識の発見が近世哲学を開いたと言える。すなわち、意識する₁は対象的意識、意識する₂は自己意識と呼ばれ、それに伴い、私₁は経験的自我、私₂は超越論的自我と呼ばれるようになった。

しかし、このような近世哲学の主流となった考えには奇妙な点がある。奇妙な点のまず第一点は、こうした私₁と私₂の区別は、まったく異なるものとしての区別ではない、という点にある。まったく異なるものならば、それらを私₁と私₂というように同じものに番号を付けることによって言い表すことはできないであろう。

私₂は私₁を私と呼ぶことができるために導入された概念である。つまり、私₂は自身が私であることを知っているのであるが、その知られた私は自身であるが故に私₂でなければならない、又同時に、それを私であるといわなければならないという必要からは、それは私₁でもなければならないのである。

奇妙な点の第二は、次の点にある。

私₁はただあるものについての意識にすぎず、私₁は自分については何も知らない、ということになるが、そのような私、そのような意識は我々の経験に照らして、本当にあるといえるのか、という点である。たしかに、そのような場合がないわけではない。たとえば、私が目の前の花を見ていることに没頭している、といった場合である。私は目の前の花に見とれており、我を忘れている。しかし、その場合でも、あなたは何をしていますのかと問われれば、我に返り、いま私は花を見ていた、と答えることができる。しかし、そう答える私はすでに、花に見とれていた私₁ではない。そのような私₁を振り返っている私₂である。どこが問題なのか。私が私₁の状態にあることは私₁の状態の時には何ら確認の手段がない、という点なのである。いったん確認したら、私は私₂の状態になっている。私₁の状態を直接確認することは原理上(定義上)不可能なのである。従って、私₁の状態というのは私₂の立場からの原理的要請によるものであって、事実の記述ではない。

一方、私₂の方も、「見る私—見られる私」という定式化において、見る私は見られていないのだからそれを私とは言えない、それを言うためには、ということで導入されたのであった。その時には見られる私が事実の記述とみなされ、それを可能にする条件として理論的に要請されたのが私₂であったのである。

すると、私₁と私₂という区別は、一方が事実の記述と見なされると他方は事実の記述ではなく理論的要請となる、という関係にあるように思われる。このように、私₁と私₂とが同時に事実の記述とはなりえないのであれば、理解の仕方2は、自己意識の構造の記述としては、根本的欠陥があると言わねばならない。

【理解の仕方3】

私₁と私₂との区別は意識する₁と意識する₂の区別に依っているが、私₂は私₁と完全に区別されているのは私₂が私₁の根拠にはならないこと、私₂が私₁の根拠であるためには、意識する₁と意識する₂とが同じでなければならないということになった点を考えれば、意識する₁と意識する₂とが、同じであるという点から出発する道が考えられる。

私₂は私₁について意識する₁、と同時に、私₂について意識する₂

先に示した構造において、私₂は意識する₁と意識する₂を同時に行っているが、これは二つの意識ではなく、一つの意識であると考えるのである。すると、私は意識するという機能によってのみ定義されているのであるから、意識する₁と意識する₂の区別がなくなることにより、私₁と私₂の区別もなくなる。

私₁と私₂は同じものである。

このように考えれば、事態はずっと単純になる。私は何ものかを意識するが、私が何ものかを意識することは同時に私自身を意識することでもあると考えるのである。しかし、この考え方にはいくつかの難点があるように思われる。それはまず第一に(難点₁を指摘する議論₁)、私は何ものかを意識し、且つ、そのことは私自身を意識することだとすれば、私は私のすべての認識(知る働き)について知っていることになるのではないか。もしそうであるならば、私が認識について問いを発するということはあり得ないことになる。しかし、事実、私たちは認識について問いを発している。

この議論にはいくつかの前提があり、それを疑うことによってこの難点を避けることができる可能性はある。

その前提とは第一に、認識とはすべて意識の作用である、というものである。

その前提とは第二に、意識について意識するとは、そのすべての部分にわたって意識することである、というものである。

第一の前提を否定すれば、認識とは、少なくとも部分的には、意識の作用ではないことになる。意識の作用ではない認識とはいかなるものと考えたらよいか、それは措くとして、認識のその部分に関してはそれは無意識の作業であることになる。すなわち、私たちは無意識のうちに何事かを知る、ということがあることになる。何事かを知ったのであるが、そのことを意識しない(そのことに気付かない)ことがあり得る、ということを経験することになる。

そう認めてもよいのかもしれない。そもそも、「知っている」ということと「意識する」ということは別のことなのだから。知っていることの多くをいつも意識しているわけではないのだから。また、知ったということについて知らないからこそ、私たちは認識を問うのであるとも考えられる。しかし、

第一の前提を否定することからどのような帰結が生ずるか、いまだその全貌は不明であり、詳細な検討を要することである。

第二の前提のなかで、意識の部分という言い方をしたが、それはさしあたっての便宜的な表現である。意識がどのような部分を持つのか、意識はいかなる構造をしているのか、さしあたっていまのところ不明である。ここで言いたいことは、意識作用の存在自体については気付いているが、意識作用の全体については意識していないということがあり得るとすれば、難点₁は難点ではなくなるということである。私は私のおこなうすべての意識作用について気付いているが、意識しているという点にだけ気付いているのみで、そこで何が行われているかについては何も意識していないのだとすれば、難点₁は難点ではなくなるということである。

以上の難点₁が難点ではなくなったとしても、次のような難点がある。それは（難点₂を指摘する議論₂）、何かを意識することと自己を意識することが同じだとすることにある矛盾である。なぜなら、何かを意識する場合には、意識するものと意識されるものとは異なるが、自己を意識する場合には、意識するものと意識されるものとは同じである。ここで、何かを意識することと自己を意識することが同じだとすると、異なることと同じことが同じであるというに等しい。これは明らかに論理的矛盾であろう。

この矛盾を矛盾でなくする考え、あるいは矛盾を受け入れてもよいとする考えもあるかもしれない。そのようなものとして次の二つがある。

「汎神論」

何ものかについての意識と自己についての意識が同じものだとすると、自己と何ものかが同じということになる。何ものかとは存在するもののどれでもよいのであるから、自己と何ものかが同じということは、自己と世界が同じということである。

従ってここで私（自己）と呼べるようなものは、普通の意味での、個々の人間の私（自己）ではない。スピノザの場合に、そのような考えが示された。スピノザはその私（自己）を神と呼ぶ。そして「神即自然」と言った。

このように考えれば神が神自身を意識することがそのまま、世界を意識することになる。だが、この考えによると、必然的に自己意識であるものは一つしか存在しない。他の自己意識がこの世界の中にあると考えることはできない。なぜなら、この世界にあるものすべてはこの（最初の）自己のうちに含まれているからである。

この考えに依れば、第一の難点も難点ではなく、むしろ当然の事態だと考えられる。神においてはすべてが知られており、問いを発する必要もないからである。

しかし、この考えは私を「自己を知ろうとするもの」として考える以上、まったく相容れないことである。また、普通の意味での個々の人間（ホミノイド）である私から出発して、宇宙と一つであるような私へと、いかにして移行することができるのか、汎神論に固有の難点もあって、にわかに採用できない考えである。

「弁証法的哲学」

弁証法的哲学は「同一と非同一の同一」を主張する。これは次のような考えである。矛盾と捉えるのは悟性的立場である。人間はそれを越えて理性的立場に立ちうる。理性とはむしろ、この（矛盾とされる）自己意識なのである。自己意識は自らを非同一と同一の同一として捉える、と言うのである。そしてここには運動があるという。

自己は自己であるが、それだけでは空虚である。そこで自己は自らを「自らとは異なるもの」として立てる。すると自己は非同一になるが、それでは自己とは言えないので、再びその「自己とは異なるもの」を自己であるとして統合する。このように、同一性を回復する運動全体が自己であるという。これこそ生の現実である、という。

たしかに、我々の生を考えたとき、ただ生きている（自己が自己である、という、単にそれだけのこと、動物にもあるような…そういう生き方）というだけでは自己があるとは言えない。自己として生きているとは言えない。生きているからには他に働きかけ他と関係を結んで生きる。しかも、その場合、私がいて、その次に私以外のものと関係を結ぶというのではない、私は他への関係そのものである、という風でなければならない。たとえば、親は子供に対しての関係こそが親自身の自己なのであって、最初に親の自己があって、その自己満足のためや親の持つポリシーの実現のために子供と関係するのではない。

ただし、このように親が子への関係の中に没入している状態、子への関係そのものになりきっている状態（親子関係を例にして言っているのであって、人の取り結ぶ関係はそればかりではないのはもちろんである。それぞれの関係において、関係そのものとなるような状態がありうるであろう、人はそのような諸々の関係の総体である）は、はたして、子供から見た場合どうなるであろうか、恐らくそのような親は鬱陶しいであろう。むしろ子供の自主性を阻害するものになるかもしれない。すると、関係そのものであるような状態、いわば自己を関係の中に没入し自己を失っている状態から、もういっぺん自己に立ち戻り、子との関係を再考し、どちらにとっても自由であることを確保するような、そういう関係にならなければならないはずである。こうして、対象（非自己）に自己を疎外した状態から、もう一度自己に戻る必要がある、そうしてこそ自己が完成される、という考えである。

これは深い人生の知恵なのかもしれない。しかし、こうした考えが、自己意識の構造の記述にどのような寄与をもたらすのか、私にはよくわからない。

【理解の仕方4】

私は時間の中で自己を意識する。（私とは時間性である）

「理解の仕方3」は自己意識を基本として考えている。逆に何ものかについての意識を意識の在り方の基本と考えてみる仕方がある。

振り返れば「意識する」だけを考えていた「理解の仕方1」では無限後退に陥った。無限後退に陥ることを避けるために、自己意識（自らを知る意識）が導入されたが、必ずしも問題は解決されたわけではなかった。むしろ、自己意識を導入すると、何ものかについての意識は単なるエピソードに

墮する危険がある。

この「理解の仕方4」では、何ものかについての意識と同時に自己意識が現れると考えるのではなく、何ものかについての意識に続いて、その意識についての意識が現れる、つまり、時間的に現れると考えるのである。

「理解の仕方1」で無限後退に陥ると困る点は、私₁—私₂—私₃という系列の後者が前者の根拠（私であると呼ぶための根拠）であるにも関わらず、それが完結しないことであったが、完結しないと困るのはそれが論理的关系であったからである。しかし、この第4の考えではこの系列の関係は、確かに後者は前者を私と呼ぶために必要になり、その限りでは論理的关系であるが、それ以前にまず時間的关系である。時間が完結しないのはむしろ当然である。

先には、私₄はとても無理とされたが、実は、その都度捉えられるのは私₁、私₂、私₃、私₄、の各々であり、私₃を捉えるときは私₄が現に働いており、私₂を捉えるときには私₃が働いていたのである。従って、いつでも、

現に働いている私—過ぎ去った私

という同じ構造があるだけなのである。

ただし、この考えでは、現に働いている私を私と呼ぶことはあきらめなくてはならない。そしてこの考えではむしろ、現に働いている私を直接捉えることはできない、ということを積極的に主張することになる。実際私が現在の私ということ捉えようとしても、捉えたときには一瞬過去のものになっている。

そして、この考えでは、自己意識というものも厳密にはあり得ないことになる。私として捉えられるのは常に過去の私なのであって、現在の私とは異なっている。現在の「私」と次の瞬間呼びうるものは過去の私からは常にはみ出している。時間の中で恒常的な「私」が流れて行くのではなく、私とは、たえず未知なる何ものかへと私自身を越えて行く超越の運動として、もともと時間的存在なのである。

この考えにとって、唯一残る問題は、次の問題である。

現在の意識している何ものかが、どうしていつも「私」と呼ばれるようになるのか。それを保証しているものは何か。この問いである。デカルトはこの問いに気付いていたように思われる。デカルトの時間の不連続説と連続的創造説、そして私の存在が神によって維持されていることの表明はそれを物語っている。近代における意識概念の第一発見者において、すでに、意識は意識以外のものによってその存在を維持されていた。デカルトの場合それは神であった。神を想定しない場合、何が私の存在を維持しているのだろうか。何が私を自己であり続けさせているのだろうか。

注

(1) ナルキッソスの母親は水の妖精レイリオペー、父親は河の神ケーピーソスであることと、彼が生まれた時、予言者から「己を知らなくば長寿をまっとうできるであろう」と言われ、そのため、自

分の姿を見ないようにして育てられたというエピソードとから、ナルキッソスは不死なる神と死すべきものである人間との中間的存在であると考えられるが、神や妖精も含めてギリシア神話に登場するキャラクターはすべて古代ギリシア民族の創生した人物像と考えられるゆえ、ナルキッソスもそのような「人物像」の一つと考えておく。

(2) 後で触れるように、人間の場合、自己鏡映像の認知ができないケースは、重度の精神障害や老人性痴呆症の末期など、特殊な場合だけである。

(3) ヒトを含む霊長類を対象とした自己鏡映像認知に関する生態学および比較認知科学研究については、最近の成果の概要が以下の論文に要領よくまとめられており、本稿で利用した情報の大部分はそれによっている。

井上徳子・松沢哲郎著「自己意識の系統発生」(芋坂直行編『脳と意識』1997 朝倉書店 所収 pp242-260)

(4) ホミノイド以外にも、新世界ザルのワタボウシタマリンや旧世界ザルのニホンザルやブタオザルについては特別な条件下で(前掲書p248)、また、イルカについても(前掲書p247)自己指向性反応の報告があるという。また、自己指向性反応であるかどうか不明であるが、「鏡を見て自分だとわかる」という例が、次の本の中で、新世界ザルのオマキザルについて語られている。

立花隆著『サル学の現在・下』p155

(5) 以上は健常児の場合である。自閉症児やダウン症候群の幼児の場合、発達がやや遅れるが、およそ2歳(健常児が自己鏡映像認知ができる年齢)には、自己鏡映像の認知ができるようになる。しかし、健常児の2歳程度の精神年齢あるいは発達年齢に達しない重度の精神遅滞者や重度の精神病患者では、幼児、成人に関わらず、自己鏡映像を認知することは不可能だという。老人性痴呆患者の場合、軽度の段階では自己鏡映像の認知ができるが、重度になると認知できなくなるという。(前掲書、井上・松沢論文による)ヒトの場合、二歳程度の知能発達段階に達しているかどうか自己鏡映像の認知ができるかどうかの分かれ目になるようである。

(6) 鏡とは見えないものである。見えるのは鏡に映った像、鏡の枠、鏡面の汚れやゴミなどである。「鏡の働きをするもの」が汚れていたり曇っていたりして、見えるものとなっている場合は、鏡の働きをしていない。鏡の働きをするものそれ自身は見えてはいけないのである。

(7) 鏡に相当する「私」はこの構造から、はずされている。従って、このはずされた「鏡の働きをする私」を考慮に入れた自己意識の構造論を展開することも、本稿の課題からはずされている。本稿で述べられる自己意識構造論は読めばわかるとおり未完成である。この「鏡の働きをする私」あるい

は「意識からは見えない私」を考慮に入れた自我論は今後の課題としたい。